



Title	宇賀村先生「交換ノート」論文によせて
Author(s)	古川, 宇一
Citation	情緒障害教育研究紀要, 14: 28-28
Issue Date	1995-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/9213
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

- ・個別の時は、いくつかの課題を組み合わせ、早く終えても追加しないことと、興味・関心を示していることを利用し、転換・拡大をはかる遊びを随時取り

入れるよう配慮してきた。

- ・2年生後半からは、教科的な内容にウエイトを置いて進めてきた。

宇賀村先生「交換ノート」論文によせて

古川 宇一

宇賀村 睦 先生が昭和63年3月に、札幌市立琴似小学校（情緒障害学級）を定年退職されて7年になります。

現在は週1回のウレシバ共同作業所でのボランティア活動、北海道情緒障害教育研究会への研修指導、障害児学級担当者から要請されての助言指導、また、情緒障害児の父母の会、学習障害児父母の会への援助と、ますます活躍され情緒障害教育第一人者の本領を発揮されています。

先生は昭和42年に特殊学級（精神薄弱）で自閉症児を受け持たれ、昭和47年、本道初的情緒障害学級を担当され、20数年にわたって自閉症児の指導に当たってこられました。その間、北海道情緒障害教育研究会事務局長として、本道情緒障害教育の牽引的役割を果たされました。

本論文は、先生が退職される前の2年間、T君と親御さんへの指導について、交換ノートの記録を中心にまとめられたものです。この膨大な指導記録と適切なアドバイスにだれしも驚嘆の念をおぼえることでしょう。以下にいくつか私が学んだ点や感想を列挙してみます。

- ①2、3月頃の入級が決まった時点で担当の医師・指導担当者へ会い、指導経過・現在の状況等について詳細な資料を収集し、指導の方針を検討しています。幼児教育と学校教育の連携が求められていますが、先生は入級決定の段階で即時に活動を開始しています。まず、第1に学ぶべき点です。
- ②入学式当日から大学ノートを渡し、家に帰ってからの様子や感想・悩みなどを毎日できるだけ詳しく、また、先生も学校でのT君の様子を詳細に書いています。その量の多さに驚きます。
- ③送り迎えの時に話しは出来るものの、言いつばなし、聞きつばなしになることも多い。記録を残すことで、教師も親も反省と方針検討に大きな力を発揮します。読み返すことによって、いい関わりはさらに伸ばし、悪い関わりかたをあらためるきっかけになります。
- ④予告を与えることによって、子供が自分の予定をたてやすくします。（4月13日）
- ⑤受容とけじめ（4月16日）、躰の基本（5月7日）が述べられています。けじめ・躰を強調し、場合によっては訓練的強制的なものになることがあります。同じけじめ・躰の言葉で表現されるにしても、先生の心根が優しく、子供が先生を信頼していれば、けじめと躰は生きたもの

となりましょう。もし、そうでないなら、けじめ・躰を強調すると、逆の効果を生むことありましょう。

⑥1学期末の懇談で、「『なぜこんなにまでして』と思ったが、今になってみるとやって良かったし、とても大事なこととして胸に刻み込んでいる」という母親の言葉で、先生はこれでもうお母さんは心配ないと思った、と言われます。

⑦10月2日、5日に「お母さんの立場」と「おばあちゃんの立場」が示されています。やさしく甘やかそうとするおばあちゃん。将来を見通して躰を厳しくしようとするお母さん、そのお母さんを的確に支えていらっしゃる。TEACCHプログラムでは親を共同療育者として位置づけていますが、先生の実践はまさに親を共同の指導者として位置づけ、アドバイスをし大きな成果を上げられたと思います。

⑧冬休み中に、言葉が飛躍的に伸びます。しかし、慎重にというアドバイスがなされます。周りの者が喜んで、発語を無理強いすることで成長を阻害する恐れのあることを注意しています。

⑨2月26日のエピソードには、ご家族の方がいかに地域での生活に苦勞されているか、その一端がしのばれます。また、ここでも先生が見事に支えていらっしゃいます。

⑩先生は退職後も、ほぼ月1回、電話で連絡しあっているといいます。「これからもこのつながりを大事に続けていこうと考えて」いらっしゃいます。

宇賀村論文から学ぶべきことは山のようにあり、自分の能力に応じてしか学びとれないかもしれません。しかし、私たちに力強い指針を与えてくれることは間違いないと思います。

自閉症であるわが子を育てられた河島淳子先生は、「自閉症児を育てるには、適切で一貫性と継続性のある教育が必須である」と述べられ、そのニーズに答えられるかどうかを学校教育に問われながら、同時にもっとも大きな期待を寄せていらっしゃいます¹⁾。宇賀村先生はその期待に応えられる先生であり、私たちは後に続かねばならないと考えます。

1) 河島淳子（1992）：自閉症児とともに—母として小児科医として、講演資料